『公共事業と現代資本主義』

上記は宮本憲一・山田明編として垣内出版から 1982 年に出版した本のタイトルである。若くて未熟な私が編者になったことを「ヘン」に思った人もいたようだ。私が編者になったのには「わけ」がある。「はじめに」で宮本教授も書かれているように、途中から研究会の事務局長を山田にバトンタッチして、なんとか一冊の本にまとめることができた。研究会を立ち上げて刊行にこぎつけるまでに 7 年近くかかった。「日本の共同研究は、相互の義務感がとぼしいので、完成までに長年月を要する欠陥がある。」

『公共事業と現代資本主義』は、講座「公共性を考える」の第 1 巻として編集された。第 2 巻は山本英治編『現代社会と共同社会形成』である。本書の目次を示しておこう。

1.社会資本論の今日的意義(宮本憲一)

2.社会資本をめぐる内外の諸論争(加藤一郎・寺西俊一)

3.公共事業と大都市財政の危機(山田明)

4.社会資本と資金調達(保母武彦)

5.農村社会資本の現状と課題(深井純一)

6.トヨタ自工における在庫削減と道路(野原光)

7.水資源・水環境の公共的管理(仁連孝昭)

8.現代廃棄物問題(平野隆之)

終章.社会資本充実政策の危機と今後の展望(宮本憲一・山田明)

なんといっても第 1 章「社会資本論の今日的意義」が注目された。宮本教授による名著『社会資本論』の初版から 15 年、改訂版から 5 年ほど経過しており、社会資本や公共性の定義などに関心があつまった。私は第 3 章と終章の(1)(2)を担当したが、いまから考えると未熟さが目立つ。この本を編集にかかわったことにより、その後も公共事業や社会資本にこだわって研究をつづけてきた。それから 20 年余り経過して、『公共事業と財政』を刊行できたのも、この本のおかげである。

さいごに、宮本教授による締めくくりの文章を引用しておく。「公共事業が巨大な土建資本と中央政府の独占物であることをやめて、真の公共性=共同性の事業となることが、民主的な行政改革の第一歩であろう。」

(6 月 10 日記)